

## 第Ⅵ部 ねぶたの実践記録(2005年度)

### 第1節 ねぶた祭り・制作についての講話の実践記録

#### (1) 講話の目的

青森市立大野小学校の教諭から、ねぶた制作・ねぶた祭りについての講話を依頼された。ねぶた祭りなど、古くから津軽地域に伝えられている伝統文化を実際にねぶた制作・ねぶた祭りに携わっている者から、ねぶた・ねぶた祭りの歴史から現在に至るまでの経緯を児童に教えてほしいという依頼であった。また、私自身の「ねぶた師までの経歴」ということで、ねぶた制作の裏話も講話をしてほしいとの学校側からの要望があり、平衡して、児童に総合的なねぶたについての講話をし、ねぶた制作・祭りを身近に感じてもらうことを目的とする。

#### (2) 対象学校・学年・人数・日時・場所

青森市立大野小学校・4学年・157名・平成17年度11月25日・体育館

#### (3) 講師

ねぶた師弟子 立田健太

#### (4) 実践記録

青森市立X小学校の児童のねぶた祭り・制作の環境は十分とは言えないと4学年の主任がおっしゃっていたため、講話の導入として私が小学校4学年の時に制作したねぶたの面を持参してステージに出向いた。

### 1、立田健太のねぶた師弟子になるまでの経歴について

子どもたちは、何を持ってきたのかとざわついている中で、ねぶたの面をステージの端に置き、自己紹介を始めた。(演台があったが、ステージから降り、階段で話をした。)

「青森市立X小学校4年生の皆さんこんにちは。只今、主任先生のZ先生からご紹介を頂いた立田健太と言います。名字、名前を入れて『た』が3つもでてくる私でも何かおかしく思う名前ですね。さて、今日は皆さんにねぶたの話をしに来ました。さて、ここで皆さんに一つ目の質問をします。ねぶた祭りを知らない人はいますか。」

ここでは、何人かの児童になぜ知らないかを問いかけたところ、「転校生だから」という児童が挙手をしていた。

「それでは、二つ目の質問です。ねぶた祭りにハネトとして参加したことがある人はいますか。」

この質問に対し、少数の児童が手を挙げ、さらに「誰と行きますか。」の質問をすると、「親と行きます。」の答えがほとんどであった。

「次に、三つ目の質問です。ねぶたを作ったことがある人はいますか。」の質問に対して手は上がらなかった。

この質問をしてから具体的な内容に入っていった。まずは、私が、ねぶた師になるきっかけからお話をした。

「実は私、実話と言うこともないですけども、ねぶたを作っているのです。趣味として行っているのではなく、ねぶた師といわれるプロの方に弟子入りをしています。私の師匠、ねぶたの先生は内山龍星先生と言います。私になぜ、ねぶた師になろうと思ったかという、五歳の頃に見たねぶたに感動をして、それが内山先生のねぶただったのです。それから『ああいうねぶたを作りたい』と思ったのがきっかけです。見たといっても、ねぶた祭りの時もそうですが、ねぶたを作っている時から見ていて、骨組み・電気配線・紙はり・墨書き・ロウ書き・色つけ・台上げと一台のねぶたができるまでを五歳の頃にしっかりと見ました。そうすると、ねぶたができるまでを見ることができ、見に行くたびにねぶたが変身をするように見えてきて、言葉では表せないような感動を受けました。それからは、下手なねぶたを書いた紙を玩具の車に付けて、『どんこどんこ』と一人でねぶた祭りをやっていました。その頃はまだY小学校の隣にねぶた小屋がありましたから、親と見に行っていたのですが、小学校に入ったときに駅の近くの三角の建物のアスパムの周りに小屋が移動しました。私は駅から近いF小学校に通っていたので、学校が終わるとランドセルを背負ったままほとんど毎日ねぶたの作業を見ていました。それも内山先生の小屋だけを見ていました。開いていないときは、他のねぶた師の小屋も見ていましたが、そんなある日、家に針金がたまたまあって、見よう見まねで作るようになりました。どうやって作るのかが分からなくなると、また小屋に行きずっと2時間、3時間は見ていましたね。こういう人をねぶた馬鹿と言います。つまり私は馬鹿なのです（ここで、真剣に聞いていた児童から笑いが起こる）。馬鹿でもいいのです。ただ、ねぶたを作ることが楽しくて、楽しくて仕様がなかったのです。今もそうですが。そして、小学校5年生の時にいつもの通り内山先生の小屋を何時間も見ていたら、「小屋に入って見てもいいよ」と言われました。あの時のうれしさは今でも覚えています。ねぶた小屋には作る人しか入れませんから、まさか入れる時が来るとは思っていなくてね。そして内山先生が、『ねぶた好きなのか』と聞かれ、『はい』と答えました。そこからねぶたの話を作業中にも関わらずお話をしてくれました。そんな中、『ねぶた作ったことある』と聞かれ、『見よう見まねで作ったことはあります』と答えました。そうしたら先生が、『じゃあ、手伝ってみる』とおっしゃったので、その日から毎日毎日小屋に行きねぶた制作のお手伝いをしました。もちろん、宿題はほとんどやっていった記憶がないですね。

手伝いに行って、何日か経った頃、先生が、『ねぶた師になりたいの』と聞いてきたので、『はい。弟子にしてほしいです』と言ったら、『ははは』笑われて、『弟子になりたかったら、3年間通ってみろ』と言われました。『そうしたら、弟子になれるかもしれないな』と言われ、がんばってというか、学校より、まじめにやっていたと思います。

さて、ここまでが小学校までの私の話でした。先ほど、見よう見まねでねぶたを作ったと言いましたが、実は、その一つが残っていました。皆さんは今、小学校4年生ですが、私が小学校4年生の時に作ったねぶたの面を今日持ってきました。」

このねぶたの面は夏休みの工作で制作したもので、原型がまだしっかりとしていたために、持参した。また、講話をする対象学年が4学年であったため、都合が良かった。

ステージの端に置いてあるビニールを被った面を中央に持ってくると、児童は顔を左右に動かし、見えるようにしていた。

「さて、これが4年生の時に制作した面です。どうですか？下手でしょう。今見るとすごく恥ずかしくなりますよ。」

階段から下り、児童のそばまで行き間近で見せた。また、後ろの席の児童のために後ろの方にも行き、間近で下手なねぶたの面を見てもらった。

「この下手なねぶた面はしばらくの間、ステージに座っておいてもらいましょう。さて、先ほどは小学校までの話をしました。ここからは中学校の話です。中学校に入学すると、部活をやらなければいけません。私は、バレーボール部に入りました。結構強くて、練習の休みはありませんでした。練習も厳しかったしね。それでも、部活が終わってからねぶた小屋通いは続けました。練習が終わるのは7時半頃で、家に着くのは8時で、ご飯を食べないで道具をおいてから小屋へ直行です。疲れていても行きました。そして、中学校2年生の時に正式な弟子として認められたのです。うれしい気持ちもありましたが、不安もありました。弟子と、お手伝いさんは身分が違いますからね。しかも、弟子になったその年に、T町会から子どもねぶたの制作の依頼が来ました。幅3m60cm・高さ2m・奥行き2m50cmのねぶたです。大型ねぶたの三分の一の大きさですが、大きいですよ。その制作はすごく、すごく楽しかったことを覚えています。辛いこともありました。部活もやっていたので、時間を作るのが難しくなってきた、なかなか手が付けられなくなったのです。そしたら、内山先生に怒られました。『どういう気持ちでねぶたを作っているんだ。これが大型ねぶたであれば、来年からは注文が来なくなる。もっと気合いを入れてやれ』と言われました。そこで『はっ』と思い、寝ないでもねぶたを作っていました。あの時先生に厳しいことを言われていなければ、弟子としての私がいなかったかもしれません。」

「中学校を卒業して、高校に入学しました。青森県立青森K高等学校です。ここでは、電気について勉強したくて入りました。電気といっても、ねぶたの電気に役立つことを学びたく入りました。高校の頃からは徐々に内山先生がそれまでやっていたねぶたの部品などを任せられるようになりました。何回何回もやり直して、手や足を作った事があります。また、色を作る作業もやらせてもらい、弟子としての作業をやらせて頂きました。高校の1年生から今もそうですが、ミニねぶたの制作の依頼が来て、今年で5年目になりますが、毎年制作をしています。駅、市役所、空港、フェリー埠頭などに飾られるねぶたの依頼です。小さめのねぶたですが、作ることの楽しさは今も昔も同じような感じがします。」

## **2、ねぶたの歴史・制作について**

ここまでは、私的経歴をお話しし、後半はねぶたの歴史・制作についてお話しした。ねぶたの歴史は、いくつかの説があるが、ここでは通説として語られる「眠り流し説」につい

て触れた。

「さて、ここからは、ねぶたのことについてお話しします。私の話ばかりですと眠くなりますから。さて、ここで質問です。四つ目の質問になるかな。ねぶた祭りはいつから始まったか説明できる人はいますか。」

この質問に対しては、一人も手を挙げなかった。

「ねぶた祭りは私達が生まれる前から行われていました。生まれる前と言われてもずっとずっと前です。(4学年は歴史の授業がカリキュラムとして組み込まれていないために、抽象的に説明した。) お侍さんが刀を振り回していた頃からだと記憶にあります。その記憶は、絵を書くのが好きな人が、ちゃんと書いて残していたのです。でも、その絵は今のねぶた祭りのようではありません。小さな木枠・灯籠を作り、そこに「眠り流し」と書いて川に流しているのです。今のねぶた祭りとは全く違いますね。その眠り流しですが、言葉から分かりますが、眠りを流すのです。眠りというと「眠い」の眠りを皆さん想像すると思いますが、昔々は違ったのです。昔々の眠りとは、目を瞑ってしまうこと、つまり死んでしまうことを言ったのです。しかもその眠りは病気で、その病気にかからないように流してしまう。これを「眠り流し」といいます。その灯籠みたいなものが大きくなって、今のねぶたのようになったといわれています。この他にも、ねぶた祭りが始まったお話しがあるのですが、ちょっと難しくなるので、今日は眠り流しがねぶたの誕生だということを知って頂ければと思います。」

子どもたちは真剣に聞いていたが、反応が薄かったため、理解には時間がかかると判断したため、ねぶた制作のお話に移った。

「さて、今日最後の話です。始め皆さんにねぶたを作った事があるか聞きましたね。ねぶた制作は下絵書き・骨組み・電気配線・紙はり・墨書き・ロウ書き・色つけ・台上げの8つの作業があります。

下絵書きは、絵を書くことから始まるのではなく、どのような題材・物語にするのかをたかさんの本や資料を見て決めます。日本の歴史、歌舞伎、中国の歴史(三国志・水滸伝など)、伝説などから選んでこの物語をねぶたにしたいと思ってから、絵を書き始めます。絵を書くにしても、どういう風な格好(構図)にすればいいのかがとても難しいのです。下絵を描いている段階で横のイメージ、後ろのイメージが頭に入っています。ねぶた師の世界では、その下絵ができるとこのねぶたはいい、このねぶたはいまいちだと判断するのです。下絵を書くために何回も何回も書き直します。そしてできた下絵に色を付けて完成します。

骨組みの作業はまず、面から作ります。そして、手足を作ります。それに腕・すねをつけます。そしたら、土台を作り、柱を立てて面の位置を決めます。この作業は下絵を見ながら進めます。とても難しい作業ですので、慣れていないと時間がかかります。面の位置が決まったら、バランスを見ながら腕をつけてそこに着物などの服を針金で輪郭をとっていきます。その輪郭の中に針金で紙が貼りやすいように骨をくんでいきます。骨組みは、針金だけでなく、木を使って支えを作っていきます。

電気配線の作業は、ねぶたの中の木にソケットをつけて、配線ランプを入れます。電気配線は適当に入れているのではなく、木の陰にならないようにとか、明るすぎないようにとか細かいところに気を使って行われます。

紙はりの作業は、骨組みをした一つ一つのマスに一枚一枚貼っていきます。貼り方は、針金には木工用ボンドを歯ブラシでつけて、その枠に合う紙を貼り、膨らませるようにして貼ります。そして、余った紙をカッターで切り落としますが、これも難しい作業です。

墨書きの作業は、ねぶた師が一人でやります。ねぶたの輪郭を表す線ですから、慎重に行われます。

ロウ書きはロウソクのロウを溶かしたものを湯気が出るまで温めて、筆で書いていきます。書く部分として、墨の線の片側をなぞったり、着物の模様を書いたりします。ロウは電気がつくとき光を出してくれるので、ねぶたがより明るくなるようにします。それから、色付けの時に、隣の色と交わらないようにもするのです。熱いロウですから火傷に注意しながらやります。

ねぶた制作の最後の作業として色付けです。40種類近くの色を使っています。ただ塗るだけでなく、水を使ってぼかしという難しい作業もあります。これは、何年もやらないとなかなかうまくいきません。そして最後にねぶたの面を書きます。ねぶたの面はねぶた師が書きますが、書いたねぶた師に似ると言われています。このステージにあるこの面。私に似ていますか？ねぶたの面を書いている時はねぶた小屋の雰囲気がとても重くなります。それだけ面はねぶたの命なのです。

こうして出来上がったねぶたを50人以上の人たちで台に上げます。台上げですね。ねぶたに穴が開かないように真剣に行います。そして、ねぶたに飾り（化粧）をつけ、本番を迎えます。

ねぶたが出来るまでを口で説明しましたが、伝わらない部分があったと思います。そこです。皆さん、ねぶたを作ってみませんか（この時の反応はびっくりするくらい『やりたい、作りたい』の声が上がった）。来週から「金魚ねぶた」の制作を実は皆さんにやってもらいます。但し、今回は骨組みの作業を私が皆さんの分を作ってきます。それから、今回制作する金魚ねぶたには電気は入れませんので、皆さんが実際にやる作業は何からですか？

「紙はり」と反応があり、子どもたちは楽しみにしているような顔をしていた。

「さて、私の話は時間が来てしまったので今日はこれでおしまいです。今日は長いようで短い時間でしたが、少しでもねぶた祭り・制作について知って貰えたでしょうか。本当はまだまだ言いたいことがあるのですが、最後に皆さんへのお願いです。ねぶた師の世界では後継者つまりねぶた師になりたいという人が私の下にいません。もし、ずっといないままになるとねぶた師はいなくなるかもしれません。ということは、ねぶた祭りが無くなるかもしれないのです。さあ、みなさん考えてみてください。ねぶた祭りが無くなってしまった青森の8月を…。ねぶた祭りは青森の宝です。また、多くの人がねぶた祭りを見に来ています。皆さんもねぶた祭りを大切に思ってもらいたいです。そして、どんどん囃子やハネトで参加してほしいです。もちろん、見学でもいいですが。長い歴史を持つねぶた祭りを皆さんも一

緒に楽しんで盛り上げて、大切にしていきたいと思います。私は、ねぶたを作る人間です。この中からもしねぶた師になってくれる人がいたらうれしいですね。さあ、ねぶた師になりたい人？」

「はい」と何人かが返事をしてくれた。この返事は忘れられない。

「さて、今日の話について質問があると思いますが、残念なことに、今日は時間がなくなってしまった。そこで、今日この後書いてもらう感想文に質問を書いてもいいですし、来週金魚ねぶたの制作に来たときにでも質問してもかまいません。楽しみにしています。今日はありがとうございました。」

以上で講話は終わり、児童の反応から手応えを感じ、金魚ねぶた制作の準備に向かった。

## 第2節 金魚ねぶた制作の実践記録

### (1) 金魚ねぶた制作の目的

ねぶた祭り・制作についての講話を行った学校、学年を対象に金魚ねぶた制作を行った。学校教育において教師が教えてくれないねぶた祭りの世界、ねぶた師の世界を伝達していく必要性が考えられ、ねぶた祭りについての講話をした後に、子どもたちにねぶた制作の難しさ、楽しさ、すばらしさについて体験的に知ってもらう事を目的とする。

### (2) 対象学校・学年・人数・日時・場所

青森市立X小学校・4学年・157名・平成17年度11月29日～12月2日・体育館および教室

### (3) 講師

- ・第4学年各担任
- ・ねぶた師（制作者）内山龍星
- ・ねぶた師弟子 立田健太（弘前大学教育学部技術教育研究室代表）

### (4) 実践記録

#### 1、ねぶた制作・祭りについての講話(1時間)

ねぶた祭りについての歴史・現在を話し、児童にねぶた祭りのすばらしさ、大切さ、現在のねぶた師の後継者不足など現在的問題を問いかける。

#### 2、骨組み

今回はなし。

#### 3、紙はり (3時間)

1時間、紙はりの作業が行われた。教材として予め人数分の金魚ねぶたの骨組みを製作して

おき、それを児童に配った。金魚ねぶたの天辺には糸を伸ばしておき、その糸に割り箸をつけて手に持てる形態とした。骨組みを予め製作した理由は、4 学年の各担任に事前に製作をしてもらった結果、骨組みの困難さから児童の製作は紙はりからの作業となった。また、割り箸の着付けは児童行った。

体育館において、スクリーンを使って紙はりの課程を口頭及び実践により見本をビデオカメラを通じて児童に指導をした。その後に児童に作業に入ってもらった。当日は参観日という事もあり家族の方々が児童のお手伝いをしながら作業が進んだ。家族の方々が用事で来れない児童に対しては、技術科研究室の学生や院生、またはねぶた師内山龍星氏の援助のもと作業がおこなわれた。

作業において、はじめはどの部分からはるか悩んでいた児童がいたが、金魚ねぶたは紙はりの部分が8面あるうち全部が同じ形をしたものなのではりやすいところからはらせた。家族の方々が主体的に作業をしているところもあれば、児童が主体的に作業をしている光景が見られた。

紙はりの作業内容としては、はる部分の骨組み（針金）に準備をしてもらった歯ブラシを用いて、カップに支給したボンドをつけ、和紙（奉書紙）をはる。金魚ねぶたは円球であるため、カッター又はハサミを用いて紙に切り込みを入れる。この切り込みを入れる意味を理解していない児童が多く、わかりやすく指導を施した。ここでは、いかにして丸みを作るかが焦点となる。切り込みを入れて、紙をはった部分の骨組みから余った部分をカッターで切る。ここで、カッターを使いこなせない児童は、ハサミで切り取ってもらった。

5 時間目の体育館においての作業は進路状況にばらつきがあった。

2 時間、各教室での作業であったため、児童同士で教える場面があった。作業初日では紙はりの作業を終わらせた児童はいなかった。

前日の作業内容は、紙はりであったが本時も紙はりの作業が行われた。作業場所は各教室で行われたため、適時各教室をまわり、巡回指導を施した。一斉に始まったので、4 クラスのうち3 クラスは学級担任による指導で始まった。前日の作業から、感覚をつかんだ児童もいれば、なかなか慣れない児童と分かれていた。指導及び観察をしながらつまずきを観察した。前日は体育館及び各教室で作業が行われ、実際のところつまずきが見づらかった。6 時間目においては各教室で行われたが、家族の方々もいたため、巡回指導がなかなか施せなく、つまずきを観察することが困難であった。

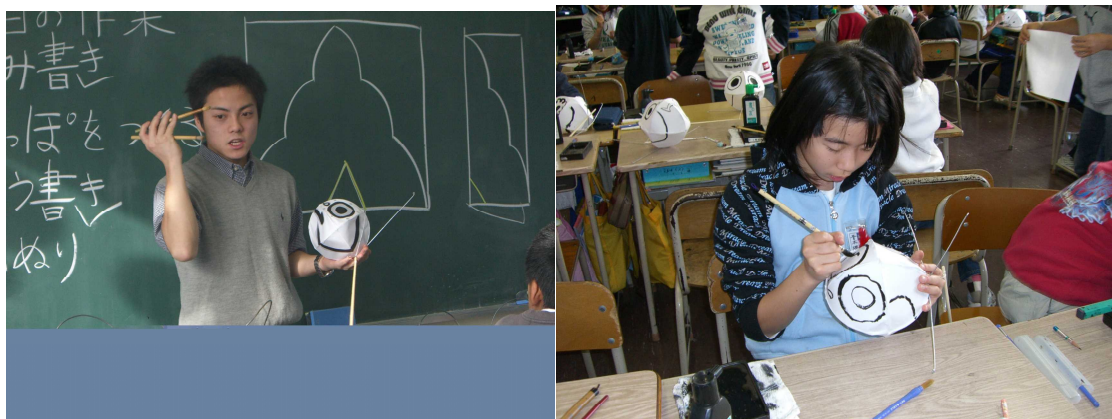
3 時間では、いくつかのつまずきを観察することが出来た。一つ目に、紙には裏表がありつるつるしている面を表にしてはるのだが、確認せず紙をはっていた児童がいた。ここでの指導は、紙をはり直すことはせず、表のつるつるした面・裏のザラザラした面に色を塗ることによって、なぜつるつるした面が表なのかを理解させるために、その時点からつるつるした面を表にしてはらせた。実際のところは、色のしみこみ方・塗った後の見た目が若干違う程度であるが、ここで表・裏の紙の性質を知ることが出来たと感じる。二つ目に、はる部分にボンドをつけ、丸みを帯びさせるために切り込みを入れるわけだが、切り込みを入れる意味を理解していない児童がいた。1 マスにはるために最低 6 カ所の切り込みが必要だが、改めて各クラスをまわり黒板を使用したり、実践において再度説明をした。ここで、児童はシワにならないようにはるための方法を確実に理解したと感じた。児童によってはカッターを使いこなせる児童と、使いこなせずに、ハサミを用いる児童もいた。結果的にはどちらを使っても良いのだが、多く

の児童はハサミとカッターを交互に使っていた。三つ目に、はった部分の余った部分を切り取る作業である。カッターを強く押しすぎて前にはった下の紙が切れている児童が紙はりの段階で最も多かったし、つまずきだと感じた。4 学年であるとまだカッターの使い方があまり器用に使いこなすことが出来ないことを知った。もちろん中には使いこなす児童がいた。下の紙が切れてしまった児童に対する対処法として、切れた部分をはり直すのではなく、細く切った紙にボンドをつけ応急手当をした。これは金魚ねぶただけでなく、大型ねぶたまたは小型ねぶた等々でも対応している。紙はりにおいては以上のようなつまずきが見られた。

#### 4、墨書き (1時間)

紙はりの作業が終わり、次の製作過程である墨書きにはいる児童が徐々に出てきた。紙はりをほとんど終えているクラスから順番に説明をしていった。黒板又は実践的に指導を施した。児童たちは習字・図画工作の授業において筆の使い方はある程度慣れているように思えた。しかし、習字・図画工作の時間においては平面に筆をおろすことはあっても、金魚ねぶたのような平面を帯びている曲面に筆をおろす事に慣れていなかったのも、最初は戸惑っていた。墨書きの作業では、最初に鉛筆で下書きをした後、墨で書いていく形式をとった。ここからの作業においては筆を使うということもあり、身近に感じながら紙はりと違った緊張感があった。墨で目・鼻・口・鰓の輪郭を書くことを説明した。完成した時点で墨の線は最も強調された線として大事な事ということで作業の説明と同時にねぶたにおいて墨の線の意味を教授した。紙はりまでの作業は皆一律に行ったが、墨書きから自由に児童の感性で描かせた。ここからは、それぞれの個性を尊重し、自分にしか書けない線ということで作業を進めさせた。

各クラスにおいて墨書きの説明をしたが、本時で紙はりの作業をすべての児童が終わらせる事が出来た。作業としては墨書きで足並みを揃える事が出来た。



#### 5、ロウ書き (1時間)

前日までに、各クラスの児童は墨書きまで終え、次の作業であるロウ書きにはいった。ロウ書きは墨の線に沿って墨の線より細く縁取りをしていく。また、金魚ねぶたには鱗があるので、鱗をデッサンし、ロウ書きをしていく。

本時においては、ロウ缶が二つしかないので2クラスを対象に行った。ロウ書きをしていないクラスは、金魚ねぶたの付属品である耳と尻尾を制作してもらった。

まず、耳の製作の方法についてだが、B5版に予め切っておいた奉書紙を配り、紙飛行機を作るようにして三角形のものを制作する。それに切り込みを入れていく。切り込みは、交互に右



から切ったら次は左からと入れていく。頂点より 5 cm 当たりまでその動作を繰り返し、手で崩して弾力があるようになったら耳の完成である。三角形の頂点が金魚ねぶたの左右に着付けする。なお、耳の着付けは色塗りが終わり完全に乾燥してからボンドで着付けする。

次に尻尾の製作についてだが、B4 版の奉書紙を横長におき、半分に折る。そこに、鉛筆を用いてデッサンをするが、金魚の尻尾を想像して描いてもらった。勿論、見本として指導をしたが、児童一人一人個性のある尻尾となった。

以上の作業（金魚ねぶたの耳及び尻尾）を 4 クラス対象に行ったが、次の作業であるろう書きは前者でも述べた通り、2 クラスを対象とした。

さて、ろう書きの作業に入るが、ろうはカンに入っており、凝固している状態のものを電熱コンロで溶かしていく。ろうはパラフィンでも良いし、身近にある仏壇のろうソクでも良い。電熱コンロで溶かしていき、ろうが液状になりろうカンから煙が沸いてきたら使用頃である。ここで注意が必要なのだが、あまり煙を出しすぎるとろうカンに火が入り危険な状態になるので、ある程度煙が出てきたらコンセントを抜くことが重要である。ろう筆は予め使用しているものを用いたが、新規でろうに筆を入れる場合はろうから煙が出る前つまり溶け始めから慣らしておく必要がある。

使用頃になったら、筆にろうをなじませある程度ろうカンにろうをおとす。始めに目の回りの縁取りをする。そして、目の白目のところはろうで塗りつぶす。次に鼻のまわり、口の回りとろう書きを進めていく。次に、後ろに描かれてある鰓を縁取りする。そうしたら、鱗を書き、目の回りにろう筆の先を使いろう点を打っていく。次に、先ほど制作した金魚の尻尾にろう書きをしていくわけだが、金魚の尻尾のヒラヒラ感を出すために放射状に線を描いていった。ここでも児童に対しては、児童一人一人の感性を元に自由に描かせた。

## 6、色付け（1時間）

色付けは、予め溶かしておいた染料を用いて行った。金魚ねぶたは、主に赤色を塗ることとした。指導として、塗り方の見本を見せたが、児童に対しては一人一人の個性・完成を元に色付けが行われた。どれも個性が現れ、自分にしかない金魚ねぶたを製作することが達成された。



## 7、仕上げ（1時間）

色付けが終わり、児童は仕上げ作業にはいる。仕上げ作業としては、金魚の耳を、ボンドを用いて取り付け、また、尻尾も同様に付け、乾燥したら金魚ねぶたの完成である。

児童は、金魚の耳を取り付ける作業につまずいていた。なかなか着かなく、着けたつもり

が手についたり、児童にとっては困難な作業であったようだ。

### 第3節 ねぶた制作・祭りについての講話

#### および金魚ねぶた制作の成果と課題

##### (1) 成果

子どもたちにとって、青森ねぶたの存在とは何か。今回は、講話と「金魚ねぶた」制作を通じて青森ねぶたについて総合的に経験、体験することができたと考えられる。毎年一度のねぶた祭りを客観的にしか見られなかった児童、参加できなかった児童にとっては、季節はずれではあるがねぶた祭りについてそれまでの考え方とは違う見方でねぶた祭りをみて、参加ができるであろう（感想文からそのように感じる）。また、ねぶた祭りの歴史、または現状を少しでも知った上での「金魚ねぶた」制作は児童にとって次の年のねぶた祭りが持ちどおしくなると思われる。

ねぶた祭りの歴史・制作に関する講話を事前指導として行った結果、児童は、ねぶた祭りの大切さ、すばらしさを改めて確認できたといえる。また、実際に「金魚ねぶた」を制作することにより、ねぶたを制作する側の視点にたつて、ねぶた制作のすばらしさ、奥の深さを知り、ねぶた祭りに誇りを持つたと考えられる。

##### (2) 課題

児童にとって、ねぶた祭りについての話を聞く機会はあまりない。だから、ねぶた師を特別講師として派遣し、師匠クラスの人材にお話をしてもらった方が児童の心にもっと響くものがあったのかもしれない。今回は、骨組みの作業を除いて制作したが、発達段階を加味しながらでない、骨組みは難しいといえる。そのため、学年ごとに制作できるものを考える必要がある（例えば、灯籠ねぶたなど）。

今回は、「金魚ねぶた」を個人で制作をしたが、グループ単位あるいは、学級単位、学校単位でねぶたを制作し、運行するとねぶた祭りをもっともっと身近に感じるのではないかと思われる。そのため学校・地域・家庭の体制を整えなければならない。また、事後指導の内容の検討もしなければならないといえる。

（文責：立田健太）